

[学会] 第962回千葉医学会例会
第32回肺癌研究施設例会

日時：平成10年1月24日（土）午前9時より

場所：ホテルニューツカモト3階

1. Stevens-Johnson 症候群を契機に発症したと思われる肺病変の2症例

篠原恵理, 梅岡 誠 (千大・肺内)

症例1ではStevens-Johnson症候群を契機に呼吸障害が出現し、画像所見、気管支鏡検査にて炎症性の狭窄が見られた事、および病理所見にて肉芽形成が認められたことより閉塞性気管支細気管支炎が疑われた。

症例2は、Stevens-Johnson症候群発症後20年以上経過して多発性肺嚢胞を呈していたが、経過中特記すべき既往がないことより、その発症にStevens-Johnson症候群の関与が疑われた。

2. 自己免疫性肝炎に合併した間質性肺炎の1例

日暮浩実, 池田雄次 (千大・肺内)

豊崎哲也 (同・肺病)

横須賀収 (同・一内)

自己免疫性肺炎に間質性肺炎を併発した症例を経験した。自己免疫性肝炎にはステロイド剤が著効するが、本症例では間質性肺炎にもステロイドパルス療法及びその後のステロイド維持療法が著効した。このことからこの2つの疾患の発生機序は関連していると推察される。現在まで報告例は少なく2つの疾患の具体的な関わり合いは不明であり、今後の研究が待たれるところである。

3. 骨髄異形成症候群を合併し、亜急性に経過した分類不能間質性肺炎の1例

村上千代子, 茶谷信行 (千大・肺内)

廣島健三 (同・肺病)

竹下明宏 (同・一内)

症例は42歳男性。胸部X線上、両側中下肺野浸潤影を認め、開胸肺生検にて既存の分類に入らない型の間質性肺炎との診断を得た。パルスとPSL60mgよりの維持にて一時改善したが、減量途中で再燃。MDSの合併もあり、全身状態は悪化、死亡した。病理診断的にも

MDSの合併に関しても稀な症例と思われたので報告する。

4. 臨床的に過敏性肺臓炎の合併が考えられたサルコイドーシスの1例

志村龍飛, 阿部雄造 (千大・肺内)

高野浩昌 (同・肺病)

中野雅行 (同附属・病理)

症例は41才、女性。経気管支肺生検及び左鎖骨上窩リンパ節生検にてサルコイドーシスと診断されたが、夏季になると発熱、呼吸困難出現し、胸部レントゲン写真上スリガラス陰影を認め、入院後急速に改善した。帰宅誘発試験陽性のため、過敏性肺臓炎の合併が疑われたが、血清学的検査で原因抗原を同定することはできなかった。

5. メサラジン（ペンタサ）による薬剤性肺臓炎の1例

海野広道 (八日市場市民総合・内科)

稲葉良彦 (同・消化器科)

アトピー歴のない24才女性の潰瘍性大腸炎に対して2.2g/日のメサラジンの内服開始後7日目より、38℃の弛張熱と乾性咳嗽が持続し、両側肺野の多発浸潤陰影が徐々に増悪した。蕁麻疹様の症状もみられた。BALでは、総細胞数増加と、好酸球とリンパ球が増多し、結核菌を含む培養はすべて陰性であった。TBLBは、気腔内の滲出と好酸球の増多を伴う間質性肺炎の所見であった。メサラジン中止により翌日から自他覚所見の改善をみた。末梢血液中のリンパ球を用いた同剤のDLSTは陰性であった。

6. この1年間に好酸球性肺炎と診断された7例の検討

山田嘉仁, 菊池典雄 (市立海浜・内科)

7例中1例は慢性好酸球性肺炎で6例は急性発症(2例は薬剤性肺炎, 4例は急性好酸球性肺炎)であっ